

ドキュメント

去るも地獄 残るも地獄

三池炭鉱労働者の二十年

鎌田慧

1960年7月、「総資本対総労働の闘い」三池大争議は、その燃えあがったピークから一転、終熄にむかった。スクラップ・アンド・ビルド時代の幕が開いた。1963年11月、三井三川鉱で炭塵の大爆発が発生、死者458名、CO中毒患者839名を出した。患者と家族の、長い受難のドラマが始まった。そしてヤマの男たち、女たちは、いま……………

去るも地獄 残るも地獄

一九八六年九月二十四日 第一刷発行

著者 鎌田 慧（かまた・さとし）

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟一〇二一九一

電話東京二九一一七六五一（営業）

二九四一六七一一（編集）

振替口座六一四一二三

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

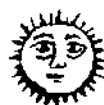
©SATOSHI KAMATA 1986 Printed in Japan
ISBN4-480-02079-9 C0136

ちくま文庫

ドキュメント

去るも地獄 残るも地獄

鎌田 慧



筑摩書房

目次

1	二つの死	7
2	島の三池魂	36
3	港の歌声	66
4	鉄鎖の響き	98
5	大変災	127
6	修羅坑	158
7	記憶の街	199
8	三池の火柱	230
	あとがき	259
	解説 生きるも地獄 死ぬるも地獄	263
	上野英信	

ドキュメント

去るも地獄 残るも地獄

——三池炭鉱労働者の二十年

1 二つの死

やがてくる日に
歴史が正しく書かれる
やがてくる日に
私たちは正しい道を
進んだといわれよう
私たちは正しく生きたと
いわれよう

私たちの肩は労働でよじれ
指は貧乏で節くれだっていたが
そのまなざしは

まっすぐに美しくあったといわれよう
まっすぐに

美しい未来をゆるぎなく
みつめていたといわれよう
はたらくもののその未来のために
正しく生きたといわれよう

日本のはたらく者が怒りにもえ
たくさんの血が
三池に流されたのだと
いわれよう

一九六〇年九月八日、三池炭鉱労働組合は、大牟田市の中心街にたっている市民会館で中央委員会をひらいて、「条件付きで中労委の斡旋案を呑む」と決定した。一六時間にもおよぶ討論のすえの結論だった。「総資本対総労働のたたかい」といわれた三池闘争は、この日で終熄したのである。それは二日まえの炭労大会の「事態収拾」の決定を追認したものであった。

総評・炭労現地指導委員会、三池炭鉱労働組合、三池炭鉱主婦会の連名で、九月二〇日に

発行されたビラには、つぎのように書かれている。

みなさん！

私たちは、三池闘争にたいする中労委の不当極まるあっせん案をめぐって炭労大会をひらき、炭労全山のヤマ元大衆討議をふくむ三週間におよぶ討議をおこなった結果「あっせん案は拒否すべきであるということ」で一致しながらも「条件つき事態収拾」をするという結論をだしました。

私たちはみなさんをはじめ、全国の仲間を守られてたたかい、久保さんの死など、多くの犠牲に加え、耐えがたい官憲の弾圧に抵抗しながらたたかいたにもかかわらず、私たちの先頭に立って闘った一二〇〇名の同志にたいする不当極まる指名解雇をこの時点ではハネ返すことができませんでした。しかし私たちは、安保と三池闘争にしめされた巨大な大衆の力を土台にして一時的なこの後退にめげず、これからの就職・就労などについての条件完全獲得のたたかいはもちろん、あくまで一二〇〇名の同志を守ってたたかい抜く決意をかたくしています。

今、会社や第二組合は「三池闘争は組合の負けだ」と勝手に結論づけてさかんに高姿勢の態度をとって中傷や誹謗をやっていますが、これまでの歴史がしめすように、労働者のたたかいは階級としての真の解放のときまでは、決定的な勝利をめざす、きびしいたたかいの連続であり、そのきびしいたたかいの成果の積みかさねによって労働者・市民の本当

の「しあわせ」はひとつひとつきずかれていくのではないでしょうか。

この文章のあとに引用されているのが、冒頭の詩である。

「やがてくる日に」は、六七年に刊行された三池労組史の『みいけ二〇年』の巻頭グラビアの第一ページにも焼きこまれている。「正しく生きたといわれよう」は、おそらくそれから二一年間、第二組合へ脱落していった数多くの仲間を横目でにらみながら、第一組合の旗を守ってきた労働者たちを、いまなお励ましているフレーズであるにちがいない。

大牟田の夏は暑い。この街には樹影がない。海岸線に張りつけられた工場群と石油工場のパイプと石炭輸送の貨物線にとりまかれて、風は身じろぎすることもない。ひとつびとは、煙突のあいだでかろうじて息をついているかのようなのである。

三池港にちかく、熊本県との県境がなかをとおりぬける四山^{よつやま}社宅は、三井アルミの、だんだら模様の煙突の下にある。太陽を照り返す塔槽がならび、パイプの駆けめぐる工場の前の曲がりくねった道を汗を拭きながら歩いていくと、炭住特有のくすんだ木造社宅が軒をつらねているのが眼にはいる。と、社宅の入口に、二本の棕櫚^{しゅろ}の木に護られるようにして石碑がたっている。「故久保清君殉難乃碑」である。一二〇〇名の指名解雇反対のたたかいが、ロクアウト攻撃、全面スト、二組結成、生産再開強行、やがてホッパー決戦へとつめ

ていくとき、四山鉦正門前でピケを張っていた久保清さんが、暴力団に刺殺されたのだった。その翌年、殉難の碑が、彼の住んでいた四山社宅に建立されたのである。

石碑の前のひらたい石に、「同志久保清に捧ぐ」として、あの作者不詳の、「やがてくる日に」の詩が刻みこまれていた。「三池に流された血」は、当時、三池に駆けつけた労働者はもとより、これなかった労働者たちにも、たいがい久保清さんのことを想い起こさせるのである。

わたしはいま、解雇されて三池を去った人たち、あるいはいまなお、ここで働いている人たちと会いつづけているのだが、そのひとたちに、「三池闘争」といわれたとき、なにを思いたしますか、とたずねると、たいがい、ホッパー決戦直前のピケでの自分の姿か、あるいは久保清さんの死のどちらかが、まっさきに口をついてでてくるのだった。

労働争議の渦中で斃れた労働者は、これまでの運動史上でもさほど多いものではない。全国労働者に注目されはじめていた三池闘争で、ピケの前線にたっていた労働者が暴力団のテロルの犠牲になったのは、まさに衝撃的な事件だった。人びとは悲しみ、怒り、そして、たたかいは急速に燃えあがっていった。碑文は、こう綴られている。

あなたは昭和二〇年一月一二日弟の薫君と共に三池鉦業所四山鉦に入社した坑内機械工の優秀な先山でした 常に寡黙で責任感が強く心やさしいあなたは みんなから信頼されて歴史的な三池闘争では福祉第一分会や第二班班長として活躍をされました

うす曇りの日の午後五時ごろ五〇余名で四山鉦正門ビケについたあなたは 大牟田荒尾を傍若にも武装パレードをしてきた一五〇名のスト破り暴力団の襲撃を受け ついに暴徒のふるった狂刃にたおれたのです

私たち三池の者だけでなく国の内外を問わぬ働く仲間のすべては あなたの死を悲しみ生命をかけたあなたの志を受けつぎ 働らく者の真の解放までどんなに辛くてもたたかい抜く決意を固めました

その日は昭和三五年三月二十九日 かわいい〇〇君 〇〇ちゃんをのこしたあなたは享年三二歳

昭和三六年三月二十九日建立

久保清さんが弟の薫さんと三池炭鉱にはいったのは、一九四五年十一月のことである。父親が軍属の機械工としてここで働いていたので、それを頼ってきたのだった。兄が一八歳、弟は一五歳であった。それまで清さんは高知県で機械工として働いていたのだが、一家は空襲で焼けだされ、母や妹二人と着のみ着のままで大牟田にやってきた。ここでは、すぐ社宅にはいれたし、コメの特配を受けることもできた。戦後、政府の「石炭超重点主義」政策とその恩恵としての食糧の特配に惹かれて、多くのひとたちが炭坑に吸いよせられていた。久保一家は四山社宅に住み、親子三人で四山鉦に出勤するようになった。父と兄は機械工とし

て働いた。薫さんは高等小学校二年中退で年齢は不足していたが、それでも坑外運搬工として、どうにかもぐりこむことができたのである。

わたしがたずねたとき、久保薫さんは、殉難乃碑のすぐそばの社宅に住んでいた。仕事はむかしどおりの運搬工だが、二八人の職場で、第一組合員は三人に減ってしまった。それが三池闘争二〇年後の現実である。兄の非業の死もあって、第二組合に行くことなど考えようもないことだった。しかし、第一組合員は停年となつて退職し、まいとし減るばかりである。若い労働者は採用と同時に二組に誘導され、一組にははいってこない。やがて、いつか自然消滅する。彼はそんなことを語りながら、「正しいことが正しくとおらん世の中ですたい」と苦笑した。

「一生苦勞してもやむをえんでしょう。労働者は会社のいいなりにはならん。こうあるもんだ、ということを示さんといかんですたい」

清さんが刺されたとき、薫さんもビケについていた。それでも、幸か不幸か、クルマからとび降りた暴力団が匕首で兄を刺した瞬間を、彼は目撃していない。混乱がとおりすぎ、病院に駆けつけたとき、清さんの意識はすでになかった。

「……四山分院から担架ですぐ近くの住居（福祉一〇棟）へはこばれる久保さんの遺体にかけてられた布団は、血にそまっていた。『おい、おれたち分会員で担ごう』みんな泣いていた。ふかく黙とうをささげる炭鉱労働者とその主婦たち。奥さんと母親の、泣きくずれるからだをしっかりと支える主婦も、おくりに出た看護婦も歯をくいしばって泣き、怒っ

ていた。夕闇がおとずれたときは、悲しみと怒りに身もだえした多くの主婦たちがあつまって、デモをはじめた。人が殺されたというのに、第二組合の家族を救出すると称し、のり込んでくる第二組合の車は、木刀、コン棒をつんでいたが、入口では押収もしない警察である。心のそこからわきあがってくる虐げられたもの——労働者の怒りと悲しみと決意が四山社宅をおおった。俺たちはもう黙ってはいられない。久保さんの生命を返せ」(組合ビラ)

「痛ましい久保刺殺事件はただちに三池全山に伝えられた。三池労組員、オルグ団の憤激はやがて怒りとなって爆発した。事件現場では、ただちに、約一〇〇〇名余の参加による抗議集会が開かれ、久保さんに黙とうをささげたあと、怒りのやり場もない気持は夜を徹してのはげしいデモとなってあらわれた。デモは荒尾署への抗議行動となった。各支部組合員、オルグ団のいきどおりは、何人といえどもおさえることはできなかった。多くのピケ小屋では夜を徹して集会がひらかれた」(『みいけ二〇年』)

三池労組本部で、蛭谷総評事務局次長が、総評としての声明を発表した。

「会社は暴力団による暴行、脅迫で労働組合のぶつつぶしをさらに強化しようとしている。二九日、社宅街における暴力団のマサカリや日本刀を持った示威行進はこれを証明している。労働争議の歴史にも見られない会社側のこのような攻撃手段をわれわれはもはや黙視することは出来ない」(『朝日新聞』西部本社版、一九六〇年三月三〇日)

その前日の二八日、第二組合は三川鉦前の第一組合のピケを突破して強行就労していた。

第二組合結成に成功した会社側は、労働者同士を激突させ、生産再開を強行したのである。

「午前六時半打ち上げ花火を合図に約一七〇〇人の第二組合員が集合場所から三川鉦に向かった。整然としたカケ足デモだった。広い三川鉦構内四つの出入り口は前夜から第一組合員がこれまた整然としたピケを張っていた。第二組合側は赤、白、青三色のハチ巻きを目じるしにした三隊に分れて行動を始める。三隊のうち黄色い坑内帽の青年行動隊を先頭にした白ハチ巻きの一隊が一つの所に襲いかかる。『襲う』という言葉はふさわしい。カケ足デモの隊列がぼろぼろに乱れたとたん黄色い坑内帽が棒切れをふり上げてピケ隊になり込んだ。コショウの目つぶしがピケ隊に飛ぶ。大人の頭ほどの石が群衆の中にドスンと放り込まれる。鉄のかたまり、鉛の水道管、赤さびたストーブのかげら。あらかじめ用意したおびただしい数の『凶器』がたちまちピケ隊をひるませる。ふらふらとピケ隊を離れて倒れかける者がある。それを青年行動隊員は竹ザオでつく。ピケ隊がおよび腰になった時、第二組合員はいっせいに横のへいをよじ登りはじめた」（『朝日新聞』三月二十八日夕刊）

この日の重軽傷者は一一五人、と同紙は報じている。三月一七日に三〇九二名で結成された第二組合「新労」は、このころすでに四六〇〇名と三分の一の勢力にまで増大していた。会社側は、生産再開を強行することによって、ストライキ中の第一組合員に精神的動揺をあたえ、さらに二組勧誘に拍車をかけようとしていた。こうして、三川、宮浦、四山、本所、港務所などで、いっせいにピケ破りが図られた。またこの日は、福岡地裁で、会社側が申請